資料紹介

張洹氏蔵北魏石床について

――孝子伝図と竹林七賢図――

黒田　彰

一

上海の張洹氏は、二点の北魏石床を所蔵されるが、一点目の北魏孝昌三年田阿赦石床（本誌別稿参照）に引き続いて、小稿では、二点目のそれを紹介したく思う。本遺品は、囲屏四枚に石闕二、床板三と脚部を伴う、完全なものである[1]（図一。高九七・〇糎、幅二一二・〇糎、奥行約一・〇米）。巻頭に掲げたのは、本石床の囲屏四枚の拓本である[2]。まずその囲屏の法量を記せば、次の通りである。

右側板――縦四八・八糎、横九四・〇糎、厚六・〇糎

正面右板―縦五〇・〇、横一〇六・〇、厚六・五

正面左板―縦五〇・〇、横一〇五・八、厚六・三

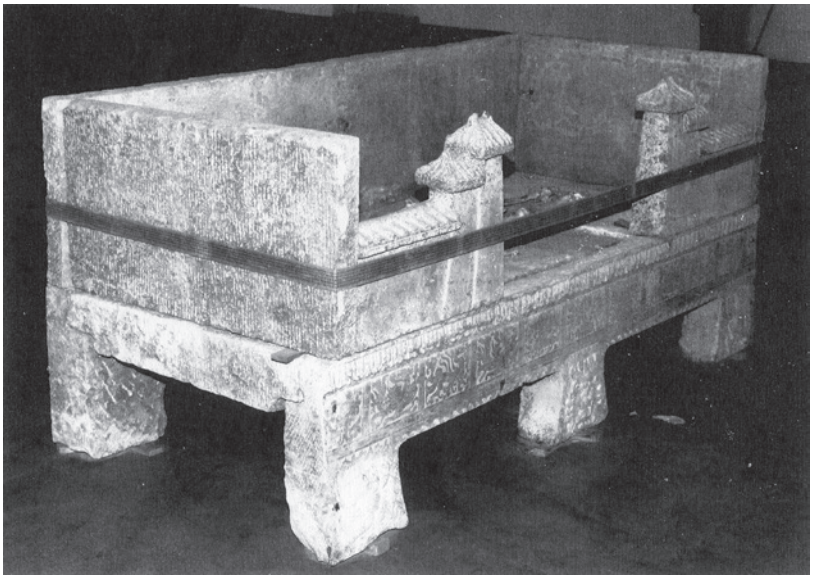
左側板――縦四八・七、横九三・四、厚六・五

本石床は、両側板を各二面に画し、正面両板を各三面に画しているので、囲屏四枚は、計十面の線刻、ごく浅いレリーフによる図像で飾られることになる。そして、両側板の奥側に馬（右）と牛（左）、正面板の中央に、男性墓主（右）と女性墓主（左）とが位置しているが、向かって右側には二つの孝子伝図（37董黯〈右側板右〉、5郭巨〈正面右板右〉）が描かれるの対し、向かって左側には、通常の孝子伝図ではなく、二つの竹林七賢図（向秀〈左側板左〉、奚康〈正面左板左〉）の描かれていることが、本石床を際立って特徴的なものとしている（後掲図二参照）。このことは、本石床が最近知られるに至った、呉氏蔵董黯石床C（37董黯図に加え、王子喬図や阮籍図〈後述〉が描かれる）や[3]、呉氏蔵王子喬石床[4]（王子喬図に加え、竹林七賢図〈山濤、阮籍〉が描かれる）、さらには呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床（墓主の翟門生はソグド人である[5]。表ての面に孝子伝図〈37董黯、5郭巨A B、2董永〉が備わることに加え、裏面に栄啓期と竹林七賢図を完備する）などとの深い関連を示唆しており[6]、本石床が近時の北魏石床研究における、一級資料に外ならないことを示すものと言えよう。さて、始めに本石床の内容を概念図として示せば、図二のようになる。その

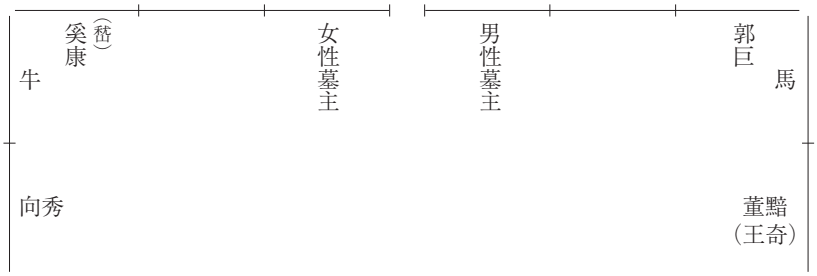
孝子伝図の配置を見ると、向かって右側即ち、男性墓主だけに（左側は、竹林七賢図）、

37董黯（王奇）→5郭巨

の二孝子図が配されているが（アラビア数字は、陽明本孝子伝の目録番号）、この進み方は、通常の北魏石床における配置順（5→37）から外れたものとなっている。[7] 敢えて憶測を巡らせるなら元、向かって左側（女性墓主側）に、5→37と予定された二図が、そこに竹林七賢図（向秀、奚康[脱]）を入れるため、そのまま右側へ移されたものか。と言うのも、37董黯（王奇）、5郭巨の話は、母親に対する孝行譚であって、むしろ女性墓主側（左側）にある方がより相応しく思われるからである。ともあれ、以下、図二に従って、本石床各図の内容を検討してみたい。



図一　張洹氏蔵北魏石床



図二　張洹氏蔵北魏石床の内容

図三に掲げるのは、本石床の右側板右に描かれた董黯（王奇）図である（題記「王寄[奇]日用三生[性]」）。本図は、陽明本孝子伝37董黯条に基づくもので、その本文を示せば、次の通りである。[8]（船橋本孝子伝の同条には錯簡などがあり、図像の考証には適さない）。

董黯家貧至孝。雖与王奇並居、二母不数相見。忽会籬辺。因語曰黯母、汝年過七十、家又貧。顔色乃得怡悦如此何。答曰、我雖貧食完麁[鹿]衣薄、而我子与人无悪。不使吾憂故耳。王奇母曰、吾家雖富食魚又嗜饌、吾子不孝、多与人恐。懼罹其罪。是以枯悴耳。於是各還。奇従外帰。其母語奇曰、汝不孝也。吾問見董黯母、年過七十、顔色怡悦。猶其子与人无悪故耳。奇大怒。即往黯母家、罵云、何故讒言我不孝也。又以脚蹴之。帰謂母曰、児已問黯母。其云、日々食三斗。阿母自不能食、導児不孝。黯在田中、忽然心

図三　董黯（王奇）図

痛、馳奔而還。又見母顔色惨々、長跪問母曰、何所不和。母曰、老人言多過矣。黯已知之。於是王奇日殺三牲、旦起取肥牛一頭殺之、取佳完十斤、精米一斗熟而薦之。日中又殺肥羊一頭。佳完十斤、精米一斗熟而薦之。夕又殺肥猪一頭。佳完十斤、精米一斗熟而薦之。便語母曰、食此令尽。若不尽者、我当用鋒刺母心、用戟(曲)鉤母頭。得此言終不能食、推盤擲地。故孝経云、雖日用三牲養、猶為不孝也。黯母八十而亡。葬送礼畢、乃嘆曰、父母讐不共戴天。便至奇家斫奇頭、以祭母墓。須臾監司到縛黯。々乃請以向墓別母。監司許之。至墓啓母曰、王奇横苦阿母。黯承天士、忘行己力、既得傷讐身。甘菹醢、甘監司見縛。応当備死。挙声哭(問)。目中出血。飛鳥翳日、禽鳥悲鳴。或上黯臂、或上頭辺。監司具如状奏王。々聞之嘆曰、敬謝孝子董(薫)黯。朕寡徳統荷万機。而今凶人勃逆。又応治剪、令労孝子助朕除患。賜金百斤、加其孝名也

董黯の物語は、中国において孝子伝テキストと共に早く滅び、長らくその物語の知られなかったことが、図像研究を不可能としていた。奇跡的に日本にのみ完本孝子伝の現存し得たことは、僥倖としか言い様がない。その意味で上掲、陽明本孝子伝の本文は、その物語の古い姿の全貌を今日に伝えるものとして、非常に貴重なものとなっている。その物語は、不孝息子と孝行息子との対比によって、話が進んでゆくという、一風変わった形態を持ち、どちらかと言うと、不孝者の王奇の方が目立つ特性を持つが、その特性については、かつて西野貞治氏が、

此の説話で三牲を羅列するのは、いわば此の説話は、貧と富、孝と不孝を甚だ対照的に用いているので、特に不孝息子の愚かさを誇張した部分として挿入したもので、朝も昼も、又晩もという御馳走攻めの表現からもその目的はこの説話の読者に、その息子のあまりにも愚かな不道徳性にあきれて哄笑することを期待したものであつたかと思う。そしてこの説話は後の我国の馬鹿息子話にも一脈相通ずるものがあり、恐らくは民間に語り伝えられたかと思われるが、ある時期に笑話として仮空に作為されたものである

ことは、広くは伝わらなかつた事によつて想像される
と喝破されたことがあり、[9] 首肯すべきものと思われる。
一方、孝子伝図としてのその図像面に目を転じると目下、管見に入った董黯図としては、新出の本石床のそれを含め、以下のような十二遺品が現存する。

(1)ボストン美術館蔵北魏石室（右側、下）
(2)ネルソン・アトキンズ美術館蔵北斉石床（正面左板）
(3)ミネアポリス美術館蔵北魏石棺（左幫）
(4)呉氏蔵北魏石床（正面左板、左）
(5)呉氏蔵東魏武定元（五四三）年翟門生石床（右側板、左）
(6)ヴァージニア美術館蔵北魏石床（正面左板、中央）
(7)呉氏蔵北魏石床（三面）（右側板）
(8)呉氏蔵董黯石床（正面右板、右、中。同左板、中）
(9)呉氏蔵董黯石床B（左側板）
(10)大同北朝芸術博物館蔵北魏石床脚部（郭巨、董黯。左半）
(11)呉氏蔵董黯石床C
(12)張洹氏蔵北魏石床（右側板、右）

ところで、董黯図研究というものは、ここ十年間にこれまで類のない、飛躍的な進展を遂げた。その具体的内容に関しては、昨年六月に書いた拙稿「董黯贅語 続貂」（『日本文学』70・6。後掲拙稿Ⅺ）に述べたので、ここでは繰り返さないが、本石床の図三との関わりにおける、要点のみを摘記しよう。まず研究の進展を拙稿のタイトルによって示せば、以下の十一論文となる。

Ⅰ「董黯贅語―孝子伝図と孝子伝―」（『日本文学』51・7）[10]
Ⅱ「呉強華氏蔵新出北魏石床の孝子伝図について―陽明本孝子伝の引用―」（『京都語文』24）[11]
Ⅲ「董黯図攷―呉氏蔵北魏石床（二面）の孝子伝図について―」（『佛教大学文学部論集』100）[12]
Ⅳ「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101）[13]
Ⅴ「董黯図攷（二）―呉氏蔵董黯石床の出現―」（『佛教大学文学部論集』102）[14]
Ⅵ「呉氏蔵新出董黯石床Bについて」（『佛教大学文学部論集』103）[15]
Ⅶ「北朝芸術博物館の郭巨董黯石脚―呉氏蔵郭巨石脚との関連―」（『京都語文』26）[16]
Ⅷ「董黯覚書（上）―董黯画巻の復元―」（『女子大国文』164）[17]
Ⅸ「董黯覚書（下）―董黯画巻の復元―」（『女子大国文』165）[18]
Ⅹ「呉氏蔵新出董黯石床Cについて」（孫彬と共著、『京都語文』27）[19]
Ⅺ「董黯贅語 続貂」（『日本文学』70・6）[20]

拙稿Ⅰにおいて述べたのは、上記(1)―(3)の在米遺品の董黯図を対象として陽明本孝子伝37董黯条を比較し、特に(1)が二場面（後述①②）、(2)が三場面（同①②⑰）から成るものであろうとする推測である。その後、二〇一二年三月に深圳の呉強華氏とお会いし、そのことを伝えると同時に、遺品(4)が始めて、在中国の董黯図として出現したものと

なることをお話して以来、呉氏は、精力的にその蒐集に努められ、現在(4)(5)(7)(8)(9)(11)の六遺品を収蔵されるに到っている。その結果、北魏時代における董黯図制作の実態というものが、従来の孝子伝図研究史に例を見ない規模と精細さをもって、明らかとなって来たのである。国家レヴェルにおける遺品蒐集の力もさることゟ、個人のコレクターの凄さというものを、呉氏は私に教えて下さった。その具体的な成果の一端は、例えば拙稿Ⅰの時点では、後述①②⑰三場面に限られた想定、しかもたかだか推論に過ぎなかった仮説が、実証され（拙稿Ⅵ）、加うるに、目下数え得る場面の数は、かつての三場面から、十七場面の多きに及び、類例と見られる各場面が複数の遺品に確認されることから、董黯図という孝子個人の段階における、粉本としての董黯画巻のかつて存在したことが、いよいよ疑えなくなる事態を迎えている（拙稿Ⅷ、Ⅸ）。上記(1)―(12)の遺品から帰納される、現段階の董黯図の各場面を示せば、次の十七場面である。

①黯の家（陽明本孝子伝「董黯家貧」）
②奇の家（同右）
③黯母通行（「忽会籬辺」）
④両母邂逅（同右）
⑤両母対話（「因語曰黯母」以下）
⑥黯母帰る（「於是各還」）
⑦黯母暴行（「奇大怒」以下）
⑧奇母暴行（「帰謂母曰」以下）
⑨奇の不孝（「導児不孝」）
⑩黯の遠行（「黯在田中」）
⑪田中の黯（同右）
⑫心痛む黯（「忽然心痛」）
⑬思案する黯（同右）
⑭黯の馳奔（「馳奔而還」）
⑮黯の帰宅（「又見母顔」以下）
⑯三牲強要（「於是王奇」以下）
⑰黯の墓参（「黯母八十」以下）

さて、①―⑰の場面が、上掲(1)―(12)のどの遺品に存するかを、一覧として示したのが、表一である（＊は、三牲の描出されていることを表わす。さらに遺品毎の場面一覧があれば、なお分かり易いが、省略に

表一　董黯図場面一覧

①黯の家	(1)右、(2)左、(3)、(9)左
②奇の家	(1)左、＊(2)中、(9)中、(11)6
③黯母通行	(7)右
④両母邂逅	(11)1
⑤両母対話	(10)A
⑥黯母帰る	(7)中
⑦黯母暴行	(7)左、下、(10)B
⑧奇母暴行	(11)2
⑨奇の不孝	(11)3

⑩黯の遠行	(8)1右
⑪田中の黯	(11)4
⑫心痛む黯	(7)左、上（左）
⑬思案する黯	(11)5
⑭黯の馳奔	(7)左、上（右）
⑮黯の帰宅	(10)C
⑯三牲強要	(*(2)中)、*(4)、*(5)、*(6)、*(8)2中、*(11)6、(12)
⑰黯の墓参	(2)右、(8)1中、*(9)右、(10)D

従う）。

図三に掲げた、本石床の董黯（王奇）図は、聊か分かりにくいが、表一における、⑯三牲強要の場面を描いたものと判断される。⑯には普通、王奇（帯剣していることが多い）と奇母、さらに三牲（牛、羊、豕。牛は鶏に代わることもある）、奇の家などが描かれるが、図三は、坐形の王奇一人を残し（左向き）、右手に食器を捧げ、左手でそれを母に勧める、その王奇以外の全てを省いた体の、董黯（王奇）図としたものである。以下に、その理由を説明しよう。

二

図三の解釈にとって、その鍵となるのが、画面に左上に刻された題記

王寄(奇)日用三生(牲)

に外ならない。この題記は、極めて重要なもので、中国及び、米国に現存する董黯図が、実は陽明本孝子伝によって描かれたことを示す、証拠となるものだからである。私がこのことに気付いたのは、二〇一二年に始めて呉氏蔵品(4)を見た時のことだった。図四は、(4)呉氏蔵北魏石床の董黯図を示したものである。[21] 図四の上部には

王寄(奇)日殺三生(牲)、猶為不孝

という題記があり、これは、陽明本孝子伝の――線部、

於是王奇日殺三牲……雖日用三牲養、猶為不孝也

を直接引用したものである。陽明本孝子伝は、

故孝経云、雖日用三牲養、猶為不孝也

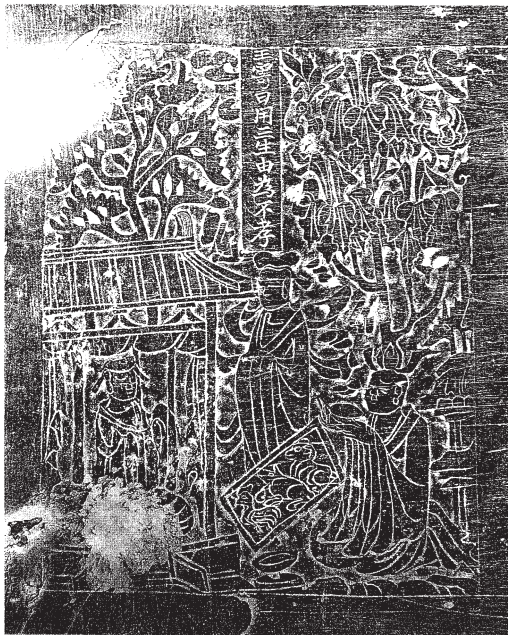
と後に明記している如く、――線部は、正しく孝経紀行章の

雖日用三牲之養、猶為不孝也

を淵源とするもので、――線部のような表現を持つテキストは唯一、陽明本孝子伝だけなのである。ところで、その――線部は、諸図像の粉本となった董黯画巻に存したものと考えられ、(4)のみならず、表一の⑯三牲強要に上げた七遺品中の、(5)、(6)、(12)（本石床）などにも、類似した題記の刻された例がある。図五は、(5)呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床の董黯図[22]（題記「王寄(奇)日用三生(牲)由(猶)為不孝」）、図六は、(6)ヴァージニア美術館蔵北魏石床の董黯図[23]（題記「此是王寄(奇)日用三生(牲)母食時」）を示したものである。以上の(4)、(5)、(6)、(12)（本石床）の題記を通覧すると

(4)王寄(奇)日殺三生(牲)猶為不孝（図四）

図四　(4)の董黯図



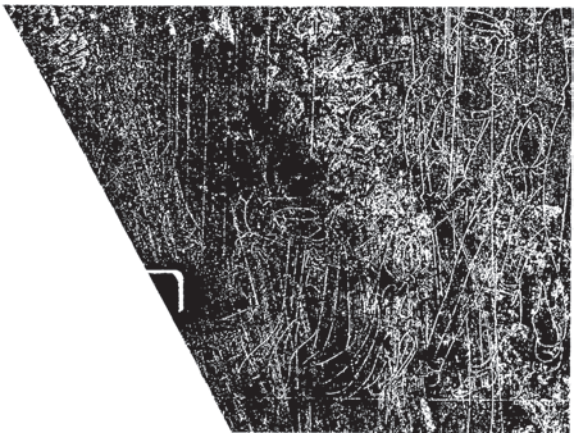
図五　(5)の董黯図

図六　(6)の董黯図

(5)王寄(奇)日殺三生(牲)由(猶)為不孝（図五）
(6)此是王寄(奇)日用三生(牲)母食時（図六）
(12)王寄(奇)日用三生(牲)（図三）

という風に、猶が同音の由に改められたり（(4)、猶（由）為不孝が省略されたり（(6)、(12)）、「此是」「母食時」が増補されたり（(6)）と、次第に形が崩れて行く所が注目されよう（殺が用に代わるのは、陽明本独自の「殺」が孝経原文の「用」に替えられたことによるもので、これも(5)(6)(12)などが、孝経原文も引く、陽明本を見た一証と言える）。さて、図三―図六の王奇に着目すると、(4)の王奇は、立って剣に右手を掛けるが、(6)の王奇は、侍者にその剣を捧げさせて、自らは左手に食器を捧げ、右手を差し出して、それを無理矢理食べさせようとする。王奇の形が一歩、本石床のそれに近付いた体である。(5)の王奇も同じで、剣の見えなくなっていることに注意したい。そして、その向きや

仕草の、本石床に酷似していることが分かる。(4)(5)(6)には三牲が見えるから、食器に盛られているのは、三牲に違いない。表一の⑯三牲強要に上げた、題記のない(8)呉氏蔵董黯石床、(9)呉氏蔵董黯石床の同場面にも、面白い王奇の図が見えている。図七に、(8)呉氏蔵董黯石床の董黯図に描かれる王奇（正面左板の左下）、図八に、(9)同董黯石床Bの董黯図に描かれる王奇（左側板中）を示そう。[24] 図七は、画面左が破断し、母や館、三牲などは、部分的にしか残らないが、やはり同じ図柄の王奇が見え（画面右は侍者）、図八も同様である。特に図八の王奇は、侍者も伴わず（三牲は、右の場面〈左側板右〉に移される）、



図七　(8)の董黯図

図八　(9)の董黯図

館と母を除くと、本石床と瓜二つの王奇が残されることに、改めて驚かされる。一見、題記を除けば、董黯図における、場面認定の手掛かりというものの、皆無とも思える図三だが、このような現存諸図との比較対照を通じて、それを⑯三牲強要の場面と判定することが出来るのである。

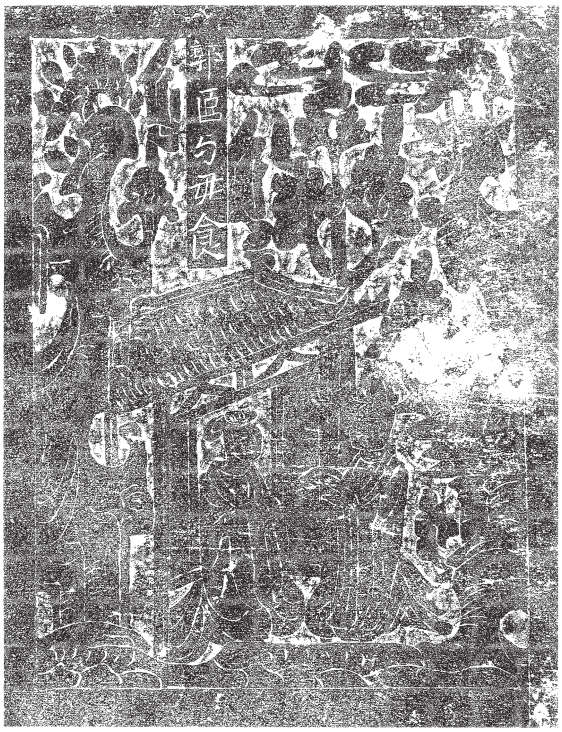
次いで、本石床におけるもう一つの孝子伝図、郭巨図を見てみよう。図九は、本石床正面右板右に描かれた郭巨図を掲げたものである（題記「郭巨与母食」）。郭巨図については、張洹氏蔵北魏孝昌三年田阿赦石床をめぐる、本誌別稿中に述べたので、その孝子伝本文や図像概説などは、そちらに譲って、ここでは、図九の図像に絞り、その特徴に触れておくこととしたい。本石床のそれは、郭巨図の現存遺品として二十二例目の図像に当たり、そこに描かれる図像の場面は、②供養（プロローグ）と判断されようこと、別稿で指摘した通りである。②の場面を持つ遺品としては目下、三（四）例が確認される内、董黯図のケースに倣って、その題記、

郭巨与母食

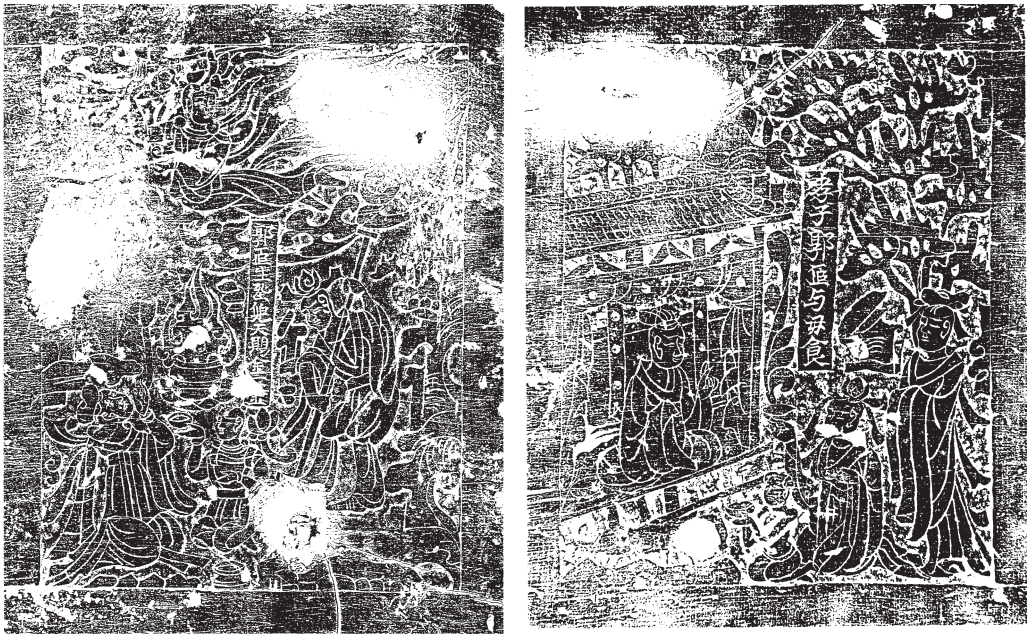
に着目すると、やはり⑭呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床のそれとの類似に気付かされる。図十は、その郭巨図を示したものである。⑭は、⑴、⑵の二場面から成っているが、ここで注目したいのは、その⑴の方である（⑵は、④穴掘り、黄金の場面。題記「郭巨生瘞（※）児天賜金一釜」）。まずその⑴の題記、

孝子郭巨与母食

は、「孝子」二字を除くと、本石床のそれと完全に一致するものとなる。その「与母食」のような表記を持つ郭巨図は、現存遺品中で本石床と⑭だけなのである。さらに、⑭から画面右端の郭巨の妻を省けば、画面右に、跪いて食器を捧げ、食事を勧めようとする郭巨（左向き）、屋内に坐す母（左向き）を描く横図は、本図と酷似したものとなることが知られるであろう。さらに軒下の壁のデザインも、全く同じである。董黯図に加え、本図にも看取される、そのような特徴は、或いは、本石床の制作年代が⑭の武定元（五四三）年近く、北魏の最末期、東魏北斉間（五三四―五七七）の辺りである可能性を示唆している。



図九　郭巨図

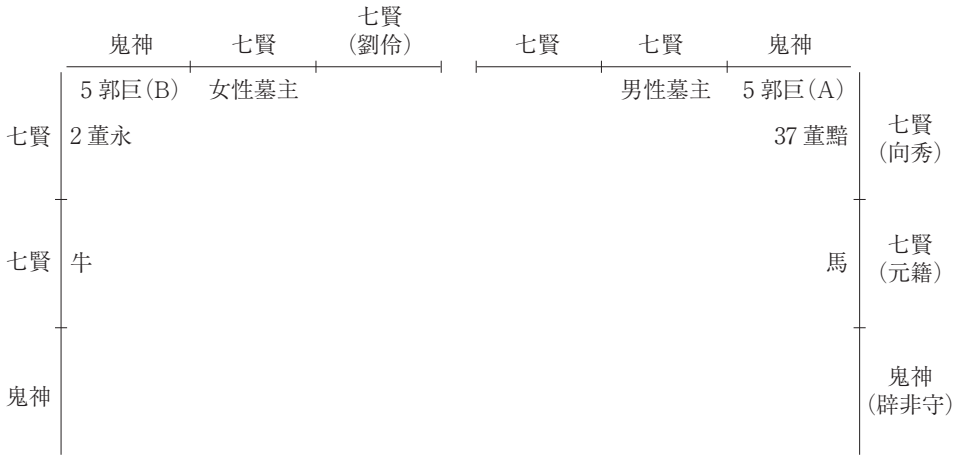


(2)　(1)

図十　⑿呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床の郭巨図

三

本石床の向かって左側（即ち、女性墓主側）には、竹林七賢の二人、奚康（嵇）（正面左板左）と向秀（左側板左）の図像が描かれている（図二）。その二人の位置は丁度、右側（男性墓主側）の孝子二人（郭巨、董黯〈王奇〉）と対称となる位置に当たり、通常なら右側と同じく孝子伝図が置かれる筈の、しかも女性墓主側の位置に何故、竹林七賢図が配されているのか、という理由については、よく分からない。そもそも本石床の如く、孝子伝図と竹林七賢図を混在させる遺品の例は、本石床を嚆矢とし、その意味で、本石床出現の学術的意義は、量り知れずに深いものがある。南朝の竹林七賢図をめぐっては、早くから南京西善橋出土のそれのあることが知られており、一方の北朝におけるそれもあった筈だという指摘は、かねてから重ねられて来たものの、肝心の北朝の例が一向に出土せず、北朝における竹林七賢図の研究は、停滞を余儀なくされて来た。その状況を一変させたのが、呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床の出現である（以下、翟門生石床と簡称する）。当該石床は、囲屏裏面に竹林七賢図を完備するという、衝撃的な内容を持つもの[25]で、今後の新たな竹林七賢図研究――特に北朝におけるそれに関し、基本中の基本とも言うべき、事実を提供する遺品に外ならない。呉氏はその後、王子喬石床と仮称する、極めて貴重な遺品を収蔵されたが[26]、そこにも竹林七賢図の二図（山濤、阮籍図。後述）が含まれていることに、再び大きな衝撃を受けたのである。本石床も含め、近時相次ぐ北朝の竹林七賢図の出現は、その研究の展開が新たな次元



図十一　翟門生石床の内容

に入ったことを物語るものに違いない。さて、本石床における、異様とも言うべき孝子伝図と竹林七賢図との混在については、外ならぬ翟門生石床の図像配置が、本石床のそれを説明する、ヒントの一つを提供するだろう。図十一は、翟門生石床の内容を、概念図として示したものである（囲屏裏面の竹林七賢図については、確定している七賢にのみ、名前が入れてある）。それを本石床のそれ（図二）と比較すると、翟門生石床の囲屏裏側に配された竹林七賢図が、表側の、しかも女性墓主側（右側）に配された経緯が推測されるのである。しかし、そこには北朝末期において、どうして竹林七賢図が突如、画材として採用されることになったのか、また、孝子伝図に取って代わるに至ったのか、という根本的な問題が新たに生じ、今後の課題が提示されよう。ここで、本石床の竹林七賢図を考察するに当たり、中国の絵画史における竹林七賢図の状況を一瞥しておきたい。

そもそも竹林の七賢は、魏晋期の清談の流行を受けて出現した、隠逸的な七人――阮籍（二一〇―二六三）、山濤（二〇五―二八三）、嵇康（二二四―二六三）、向秀、劉伶、阮咸、王戎（二三四―三〇五）を言うが、その図像は一九六〇年、南京の西善橋から出土した晋、宋間の制作とされる、春秋時代の栄啓期を加えた八人のものが優品として知られている。さらに当該遺品をめぐっては、一九六五年の丹陽胡橋仙塘湾出土南朝墓以下、七例に及ぶ図像の現存が報告されており（『大衆考古』編集部、夏連傑氏教示）、南朝における七賢図流行、受容の研究の進展が期待される。竹林七賢図の出現は、非常に早かったらしい。唐、張彦遠の歴代名画記を繙くに、既に顧愷之（三四五―四〇六）が、

〔顧愷之〕重嵇康四言詩、画為図。常云、手揮五絃易、目送帰鴻難（巻五、晋）

とあって、七賢の嵇康の図を描いていたらしい（四言詩は、嵇康の「贈秀才入軍五首」を差し、その第四首の五、六句に、「目送帰鴻、手揮五絃」と見えている〈文選二十四〉）。また、「顧画」として、

阮咸像……栄啓期、夫子……七賢（同）

などもあったらしい。さらに、「顧愷之論画曰」として、戴逵の作に、七賢を上げ、

七賢。唯嵇生一像佳。其余雖不妙合、以比前諸竹林之画、莫能及者（同）

と言うから、顧愷之や戴逵以前、既に多くの竹林七賢図が描かれていたようである。続けて、

嵇軽車詩……嵇興。如其人

ともあり、その内の軽車詩というのは前述、「贈秀才入軍五首」の第二首を差すが、この記述に関しては、阮籍図の所で改めて取り上げる。歴代名画記にはさらに、

・史道碩……七賢図……酒徳頌図、琴賦図、嵇中散図（同）

とか（酒徳頌は、劉伶の作〈文選四十七〉、琴賦は、嵇康の作〈文選十八〉）、

・戴逵画……嵇阮像、嵇阮十九首詩図（同）

或いは、

・陸探微……竹林像……栄啓期、孔顔図（巻六、宋）

・宗炳……嵇中散白画（同）

・毛恵遠……七賢藤紙図（巻七、南斉）

などとも見え、六朝時代に竹林七賢図の盛んに描かれた様を窺わせている。残念乍ら、歴代名画記に言及された竹林七賢図は、全て湮滅に帰し、現在に伝わるもののない中、それに代わるものとして今に残されるのが、南京西善橋出土の竹林七賢図や翟門生石床のそれなのである。

図十二に掲げるのは、本石床左側板左に描かれた向秀図である。題記の、

向秀字子其[期]

については、例えば向秀別伝（世説新語一言語二劉孝標注所引）に、「秀、字子期」などと見えている。本図に関しては幸い、呉氏蔵翟門生石床右側板裏の右に、向秀図が確認されており、図十三に示したものがそれである（題記「此名□」の三字目に、向の第一画の残画が残っていることから、当図の向秀図であることが判明する。趙超氏教示）。当図の向秀は、左を向いて左膝を立て、泰然と坐るが、面白いのは、彼の凭れ掛かっているのが、巨大なクッション（隠嚢）であることだろう（呉氏教示）。すると、本図（図十二）の向秀の凭れ掛かるのも、形はやや四角張ってはいるものの、やはりクッションと捉えられる。本図の向秀は、右向きではあるが、図十三と同じく左膝を立てることや、だらりと垂れた右手、顎の髭、また、画面左の童子（侍者）など、図十三と本図との密接な関連を窺わせるものである。図十四は、南京西善橋出土の竹林七賢図に見える、向秀図を示したものである[27]（榜題「向秀」）。正面を向いてはいるが、その立てた左膝や、投げ出された右足など、基本的な姿勢が、本図や図十三にも受け継がれていることが分かる。

図十五は、本石床の正面左板左に描かれた、嵇[奚]康図を示したものである（題記「嵇[嵇]康名」）。その題記に、

奚[嵇]康名

と記し、嵇康の嵇字を奚に作っていることについては、興味深い事実があって、例えば王隠晋書（世説新語一徳行一劉孝標注所引）に、

図十三　向秀図（翟門生石床）

図十二　向秀図

図十五　奚（嵇）康図

図十四　向秀図（西善橋出土）

王隠晋書曰、嵇本姓奚。其先避怨、徙(從)上虞、移譙国銍県。以出自会稽、取国一支、音同本奚焉

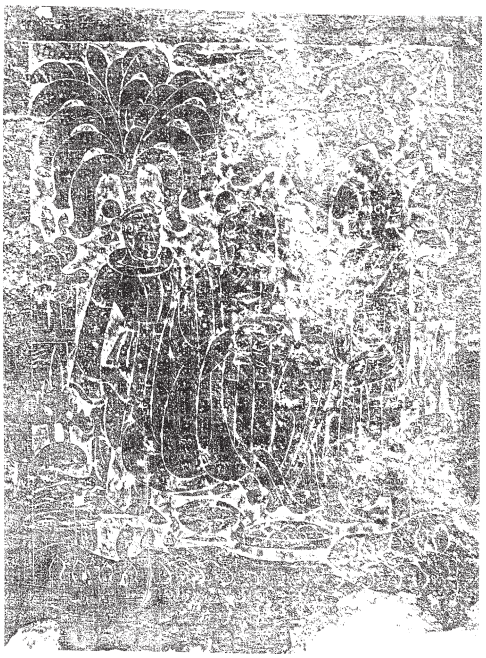
虞預晋書（三国志魏書、王衛二劉傳伝二十一裴松之注所引）に、

康家本姓奚、会稽人。先自会稽遷于譙之銍県、改為嵇氏、取稽字之上、加山以為姓、蓋以志其本也。一曰、銍有嵇山、家于其側、遂氏焉

また、晋書四十九列伝十九嵇康に、

嵇康字叔夜、譙国銍人也。其先姓奚、会稽上虞人。以避怨、徙焉。銍有嵇山、家于側、因而命氏

などと見え、嵇康は、元の姓を奚と言い、会稽上虞（浙江省上虞県）の人であったが、譙国銍県（ちっけん）（安徽省宿県南）に移り、家がその嵇山の傍にあったので、姓を嵇に改めたとか（晋書）、会稽の稽字の上部を取って、山を加えたとか（虞預晋書）、伝えられる事実があったらしい。すると、本石床は態々、嵇康の元の姓を記していることになる。三字目の名の訓法は、未勘で、教示を乞いたい。さて、本図（図十五）が嵇康図であることは、その題記から明らかと言えるが、本図を一見して驚いたのは、翟門生石床の中に、瓜二つの図像が存することだ。図十六は、同石床正面右板中に描かれる、竹林七賢図を掲げたものである。その図十六を本石床の嵇(奚)康図（図十五）と較べてみると、左手で杯を捧げ、左膝を立てて右向きに坐る、双鬟の童子形に描かれた、本図の嵇(奚)康像は、そのまま図十六にも当嵌まることが分かるだろう（但し、本図の嵇(奚)康の右手は下がっているが、図十六のその右手は上がっているようだ）。翟門生石床の竹林七賢図における人物同定を



図十六　嵇康図（翟門生石床）

図十七　嵇康図（南京西善橋出土）

めぐっては、上述、阮籍、向秀、劉伶（正面左板左）像が確定しているものの[28]、その他については、なお今後の課題となっており、新出の本石床の図十五によって、その嵇康図（図十六）が確定出来ることは、本石床の竹林七賢図の学術的意義というものを、改めて認識させられる出来事と言える。図十七は、南京西善橋出土の嵇康図を示したものである[29]（榜題「嵇康」）。その嵇康像は、基本的に図十五、図十六と似通ったもの乍ら（立てた膝が逆になっている）、決定的に異なるのは、当図の嵇康が琴を奏でている点であろう。

四

この機会に、北朝における阮籍図の問題、一、二に触れておきたい。

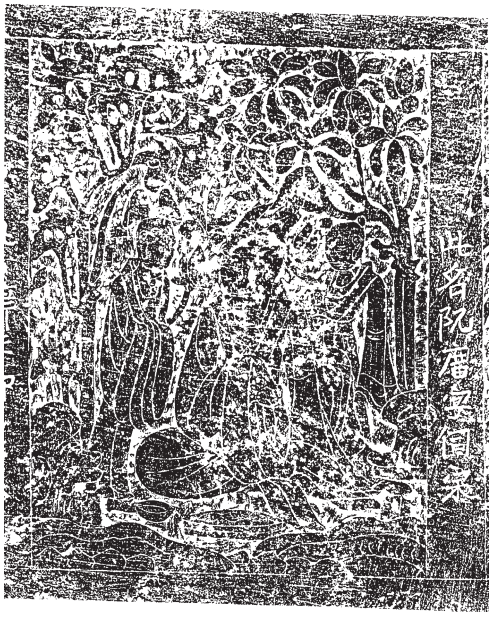
図十八　阮籍図（王子喬石床）

図十八は、呉氏蔵王子喬石床右側板、右から第四区画に描かれた阮籍（藉）図を示したものである[30]（題記「阮藉（籍）字伺（嗣）宗」）。当石床は、その第三区画に山濤（嶠）、第一区画にはおそらく王戎図も描かれる、非常に重要な遺品である。本図（図十八）とまず対照されるのは、件の翟門生石床の阮籍図なのであって、図十九に、翟門生石床のそれを掲げよう（題記「此名阮唐（籍）字伺（嗣）宗」）。両図の題記、

・阮藉（籍）字伺（嗣）宗（図十八）

・此名阮唐（籍）字伺（嗣）宗（図十九）

は、例えば晋書四十九列伝十九阮籍の、「阮籍字嗣宗」と較べ、嗣を伺に作るなど、よく似ており、両図の全体的構図にも、高い共通性が感じられる（但し、図十九の阮籍は、左膝を立て、また、特異なのは、図十八の阮籍が右手にリュトンを差し上げる点である）。それら両図に対し、際立った特徴を持つのが、南京西善橋出土の阮籍図であろう[31]（図二十）。図二十の阮籍は、左を向いて左手を下に突き、右膝を立てることに加えて、面白いのは、右手の拇指（おやゆび）を銜（くわ）えていることである。阮籍のその仕草について、例えば長廣敏雄氏は、晋書の、「阮籍……嗜酒能嘯」と記されることに基づいて、「口元に拇指を当てている……「うそぶく」さまであろうか」と推論された[32]。これは、阮籍図（図二十）が「能嘯」（晋書）と関連付けられたケースである。それに対し、前述、歴代名画記五「顧愷之論画」には、戴逵（？―三九六）の作として「七賢」に続けて、嵇康を「嘯人」等と関連付けた図像の話が出て来る。その本文を示せば、次の通りである[33]（　）内に、岡村繁、谷口鉄雄氏による口語訳を添えた）。



図十九　阮籍図（翟門生石床）

図二十　阮籍図（南京西善橋出土）

嵇軽車詩。作嘯人、似人嘯。然容悴不似中散。処置意事既佳。又林木雍容調暢、亦有天趣。

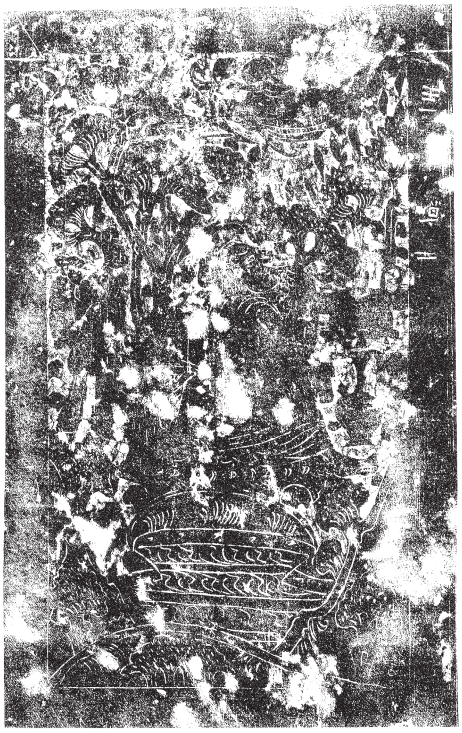
（嵇康の軽車の詩の図。口笛を吹く人（嵇康）を描いているが、しょんぼりとしてやつれはてた人のようであって、中散大夫（嵇康）の容止にそぐわない。が、画想・題材がよいばかりでなく、さらに林木もおだやかでのびのびと描かれており、自然な感じが出ている）

軽車詩というのは前述、嵇康の「贈秀才入軍五首」の第二首を差し（文選二十四所収）、その第一句に、「軽車迅邁」とある所から言う。秀才とは、嵇康の兄の嵇熹のことで、その第二首の全文は、次の通りである。

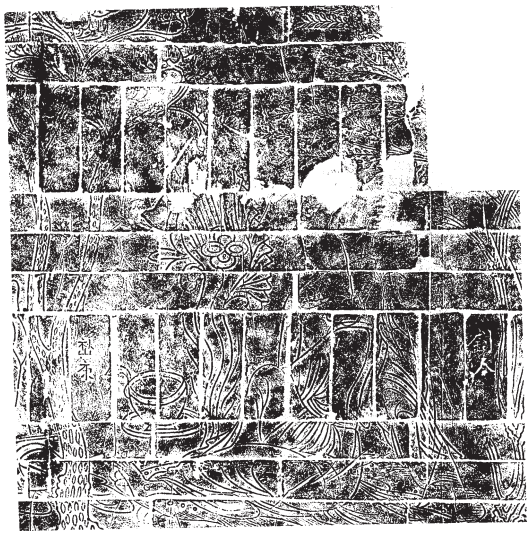
軽車迅邁、息彼長林。春木載栄、布葉垂陰。習習谷風、吹我素琴、
咬咬黄鳥、顧疇弄音。感悟馳情、思我所欽。心之憂矣、永嘯長吟

歴代名画記の「嘯人」「人嘯」は、末句の「永嘯長吟」から出たものである。ところで、阮籍図について長廣氏が嘯字を「うそぶく」様とするのは、嘯をシュウ（xiào）音とし、口をすぼめて声を引く、一般的な捉え方に従ったものである。ところが、嘯をシュク（su）音とすれば、（　）内の岡村、谷口氏訳の如く、確かに口笛を吹く意味にも捉えられるのである（集韻九、入声上屋一に、「嘯、吹気若歌」と見える）。ここで注目されるのは、戴逵が口笛を吹く嵇康図を描いていたことである。つまりそのような嵇康図がかつてあったことが確実で、顧愷之がそれに言及していることである。それは、「唯嵇生一像欲佳」と言われた、戴逵の「七賢」図とは別の嵇康図であろう。さらに

東晋の明帝司馬紹（在位三二三―三二五）には、同じ「贈秀才入軍五首」の第四首に基づいた、「息徒蘭圃図」もあったらしいから（歴代名画記五晋）、南北朝期の嵇康図には、様々な図柄のものが行われたのであろう。このことに関連する興味深い図像を、最近目睹した。図二十一に示すのは、呉氏蔵董黯石床Ｃの左側板中に描かれた、嘯人図である。[34] 当図は、銀杏の木の下に、右を向いて腰掛ける人物を描いたもので、人差指を口に銜んでいることに注目したい。当図に関しては当初、右上の「戦戦兢兢」題記から（但し、残画で裏返っている）、戦戦兢兢図かとも考えたが、どうやらそうではないようだ。まず確認出来るのは、当図（図二十一）も図二十も、指を銜える点から、口笛（指笛）を吹く、言わば嘯人図に外ならないことである。当図については、幾つかの推論を巡らせることが可能である。例えば上記、歴代名画記に言う、戴逵による嘯人としての嵇康図の流れを汲む、嵇康図と捉える仮説である。或いは、南京西善橋出土の阮籍図（図二十）の北朝における受容例と見ることも出来よう。すると、当図は、嘯人の形の阮籍図ということになる。前者を採れば、北朝において二系（図十五、図十六と当図）の嵇康図があったことになり、当図は、例えば戴逵の「嵇軽車詩」図の流れを汲むものと捉えられ、後者を採れば、同様に二系（図十八、図十九と当図）の阮籍図となり、当図は、例えば南京西善橋出土の阮籍図の流れを汲むものと捉えられよう。かつて戴逵に嵇阮像があったように、嵇康と阮籍とは、竹林七賢図の中心的な人物に当たる。ところが、当時の竹林七賢図の遺品が西善橋出土のそれしかなかった時代には、例えば画史としての竹林七賢図の形成史



図二十一　嘯人図（董黯石床Ｃ）



図二十二　阮籍図（建山金家村墓）

など、問題に仕様がなかった。さて、二〇一三年に出土した、南京栖霞獅子衝M1の西壁中後部には、左から阮咸、阮籍、山濤、嵇康四人の竹林七賢図が描かれていたが、その配置は、西善橋出土のそれとは全く異なる上、四人目の嵇康の榜題を阮籍と取り違えて、「阮步兵」としている。[35] 或いは、一九六八年に出土した丹陽建山金家村南朝墓の墓室東、西壁に描かれる竹林七賢図は、八人を完備する優品だが、[36] 例えばその東壁における嘯人形の阮籍図には、それを嵇康図と錯覚させる榜題（「嵇康」）が、画面の左に付いている[37]（図二十二。画面右には、「劉伶」とも）。それは、錯誤であるが、例えば西善橋出土の阮籍図が嘯人形とされる背景に、戴逵の嵇康図を想定することも不可能な訳ではない。それは、西善橋出土のそれをも含む、竹林七賢図における嵇康、阮籍図の形成史に関わる事柄だからである。翟門生石床を始めとして、例えば本石床に見られる如き、近時陸続と出現する、北朝における竹林七賢図の遺品は、まだ緒に就いたばかりのその形成史の探求へと私達を向かわせる、こよない原動力となるものだろう。

〔注〕

（1）図一は、張洹氏提供の写真に拠る（立松洋行氏撮影）。

（2）張洹氏提供の拓本写真に拠る（以下も同じ）。図版一―四の原石写真を以前、注（4）後掲拙稿の巻頭図版十―十三に収めたので、併せて参照されたい。

（3）拙稿「呉氏蔵新出董黯石床Cについて」（『京都語文』27、令和元〈二〇一九〉年11月）参照。

（4）拙稿「呉氏蔵王子喬石床について―付 張洹氏蔵北魏石床二種―」（『佛教大学文学部論集』104、令和二〈二〇二〇〉年3月）参照。

（5）拙稿「翟門生覚書―呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―」（『京都語文』25、平成29〈二〇一七〉年11月）

（6）拙稿「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101、平成29〈二〇一七〉年3月）参照。

（7）林聖智氏「北朝時代における葬具の図像と機能―石棺床囲屏の墓主肖像と孝子伝図を例として―」（『美術史』154〈52・2〉、平成15〈二〇〇三〉年3月）参照。

（8）陽明本孝子伝の本文は、幼学の会『孝子伝注解』（汲古書院、平成15〈二〇〇三〉年）による。参考までに、船橋本孝子伝の本文を掲げておく。

董黯家貧至孝也。其父早没也。二母並存。一者弟王奇之母。董黯有孝也。王奇不孝也。於時、黯在田中。忽然痛心、奔還于家、見母顔色。問曰、阿嬢有何患耶。母曰、無事。於時、王奇母語子曰、吾家富而無寧。汝与人悪。而常恐離其罪、寝食不安。日夜為愁。董黯母者貧而無憂。為人無悪。内則有孝、外則有義。安心之喜、実過千金也。王奇聞之、大忿殺三生作食、一日三度、与黯之母。爾即曰、若不喫尽、当以鋒突汝胸腹。転載刺母頸。母即悶絶、遂命終也。時母年八十。葬礼畢後、黯至奇家、以其頭祭母墓。官司聞之曰、父母与君敵、不戴天。則奏具状、曰、朕以寡德、統荷万機。今孝子致孝、朕可助恤。則賜以金百斤也

（9）西野貞治氏「陽明本孝子伝の性格並びに清家本との関係について」（『人文研究』7・6、昭和31〈一九五六〉年7月）。なお西野氏は半世紀以上前、後掲(1)の董黯図の考証に、始めて陽明本孝子伝の本文を適用し、董黯図研究の嚆矢をなした。

（10）拙稿Ⅰ「董黯贅語―孝子伝図と孝子伝―」（『日本文学』51・7、平成14〈二〇〇二〉年7月）

（11）拙稿Ⅱ「呉強華氏蔵新出北魏石床の孝子伝図について―陽明本孝子伝の引用―」（『京都語文』24、平成28〈二〇一六〉年12月。小稿の黄盼盼氏による中国語訳「関于深圳博物館展陳北魏石床的孝子伝図―陽明本孝子伝的引用」が、趙超、呉強華氏『永遠的北朝 深圳博物館北朝

石刻芸術展』〈文物出版社、二〇一六年〉に収められる）

(12) 拙稿Ⅲ「董黯図攷―呉氏蔵北魏石床（二面）の孝子伝図について―」（『佛教大学文学部論集』100、平成28〈二〇一六〉年3月）

(13) 拙稿Ⅳ「呉氏蔵東魏武定元年翟門生石床について―翟門生石床の孝子伝図―」（『佛教大学文学部論集』101、平成29〈二〇一七〉年3月）

(14) 拙稿Ⅴ「董黯図攷(二)―呉氏蔵董黯石床の出現―」（『佛教大学文学部論集』102、平成30〈二〇一八〉年3月）

(15) 拙稿Ⅵ「呉氏蔵新出董黯石床Bについて」（『佛教大学文学部論集』103、平成31〈二〇一九〉年3月）

(16) 拙稿Ⅶ「北朝芸術博物館蔵の郭巨董黯石脚―呉氏蔵郭巨石脚との関連―」（『京都語文』26、平成30〈二〇一八〉年11月）

(17) 拙稿Ⅷ「董黯覚書(上)―董黯画巻の復元―」（『女子大国文』164、平成31〈二〇一九〉年1月）

(18) 拙稿Ⅸ「董黯覚書(下)―董黯画巻の復元―」（『女子大国文』165、令和元〈二〇一九〉年9月）

(19) 拙稿Ⅹ「呉氏蔵新出董黯石床Cについて」（孫彬と共著、『京都語文』27、令和元〈二〇一九〉年11月）

(20) 拙稿Ⅺ「董黯贅語 続貂」（『日本文学』70・6、令和3〈二〇二一〉年6月）

(21) 図四は、呉氏提供の拓本写真に拠る。

(22) 図五は、呉氏提供の拓本写真に拠る（以下も同じ）。

(23) 図六は、Gisèle Croës, Ritual Object and Early Buddhist Art (New York, 2004), Stone funerary bed B2に拠る。

(24) 図七は、呉氏提供の原石写真に拠る（立松洋行氏撮影。図八も同じ）。

(25) 注（13）前掲拙稿Ⅳ参照。

(26) 注（4）前掲拙稿参照。

(27) 図十四は、長廣敏雄氏『六朝時代美術の研究』（美術出版社、昭和44〈一九六九〉年）図版1に拠る。

(28) 呉氏蔵翟門生石床の劉伶図については、注（5）前掲拙稿82頁参照。

(29) 図十七は、長廣氏注（27）前掲書、図版8に拠る。

(30) 図十八は、呉氏提供の拓本写真に拠る。呉氏蔵王子喬石床については、注（4）前掲拙稿を参照されたい。

(31) 図二十は、長廣氏注（27）前掲書、図版7に拠る。

(32) 長廣氏注（27）前掲書一章「竹林七賢と栄啓期の画図」48頁

(33) （　）内は、岡村繁、谷口鉄雄氏による歴代名画記訳文（中国古典文学大系54『文学芸術論集』〈平凡社、昭和49（一九七四）年〉所収）339頁による。

(34) 図二十一は、呉氏提供の拓本写真に拠る。

(35) 南京考古研究所「南京栖霞獅子衝南朝大墓発掘簡報」（『東南文化』二〇一五・4〈246〉）

(36) 南京博物院「江蘇丹陽県胡橋・建山両座南朝墓葬」（『文物』80・2）

(37) 図二十二は、姚遷、古兵氏『六朝芸術』（文物出版社、一九八一年）図版二一七に拠る。

〔付記〕

上海の張洹氏は二年前、貴重な所蔵石床の調査を許可また、私の勧めに従いその拓本を採って下さった。張洹氏の学恩に対し、心から御礼申し上げたい。さらに私を張洹氏に紹介の上、上海まで同行下さった呉強華氏にも、心から御礼を申し上げる。なお小稿は、深圳市金石芸術博物館による北朝文化研究事業の一環である。

（くろだ　あきら　日本文学科）

二〇二一年十一月十五日受理